

アジア・知財の現場を歩く (第4回)



黒瀬IPマネジメント 弁理士 黒瀬 雅志
(東京理科大学大学院イノベーション研究科客員教授)

マレーシア

—エンフォースメントの現場—

マレーシアは、一人当たりのGDP（名目）が1万ドルを超え、またGDP（名目）においてもASEAN10ヵ国の中で第3位の経済力を有する。その一方で、先進国（高所得国）入りがなかなか出来ない「中進国の罠」に陥りやすい環境にある。

この環境を克服するために、マレーシア政府は、従来の製造・輸出型の産業に依存するだけではなく、マルチメディア・スーパーコリドー（Multimedia Super Corridor：MSC）に代表される情報と通信産業を中心とした知識集約型産業の育成計画を推進しており、産業構造の高度化が進行している。同様の政策をとるシンガポールに比べ、そのスピードは若干遅いと感じられるが、他のASEAN諸国にはまだ見られない動きであり、知的財産戦略を検討する上で注目しておくべき点である。

マレーシアの知識集約型産業育成計画の進捗状況を確認するために、クアラルンプールの南方に位置するサイバージャヤとプトラジャヤを訪問した¹。

【マルチメディア・スーパーコリドー（MSC）計画】

クアラルンプールから新国際空港までの、南北50km、東西15kmの地域に、行政都市「プトラジャヤ」、情報産業都市「サイバージャヤ」などのテクノパークを建設し、情報・通信産業を中心とする、知識集約型産業を育成する計画。

マハティールもと首相の掲げた「2020年までにマレーシアを先進国に仲間入りさせる」という目標（ビジョン2020年（Visio2020））を達成するための計画であり、各種優遇措置によりIT産業を中心とする世界的な知識集約型企業の誘致が図られ、その育成・集積化を進めることにより、マレーシアを知識産業の国際ハブとするという構想が現在も進行中である。

1 訪問は、2014年11月及び2015年10月に行った。

プトラジャヤ（Putrajaya）

プトラジャヤは、2001年に連邦直轄領となった新行政都市である。入り組んだ道路により、いつも渋滞するクアラルンプールと比べ、広く整然とした道路、しっかりとデザインされた建築物、周辺の自然との調和などが考慮された美しい都市である。とりわけ、町の中央を走る広い幅の直線道路²の基点にある首相府は、モスクをイメージした大きなドームを備える見事な建物である。また、中央の道路に面して財務省、開発庁など、主要な政府機関の建物が並んでおり、マレーシア政府の新政策に対する意気込みを感じさせる。

知的財産関連の建物としては、連邦裁判所、国内取引・協同組合・消費者省（MDTCC）などがあり、後述するように、これらの機関を訪問した。プトラジャヤは、クアラルンプールと国際空港とを結ぶKLIAエクスプレスでクアラルンプールから約30分、首都高速道路で約40分の距離にあり、いずれの交通手段を用いても快適に移動できる。



町の中央通り。通りに沿って政府機関の建物が並ぶ



首相府の建物

サイバージャヤ（Cyberjaya）

プトラジャヤに隣接して開発された新興都市であり、多くのハイテク関連企業が研究開発型投資を行っている。サイバージャヤに、人材育成機関として設立されたマルチメディア大学（MMU）を訪問した。大学関係者とのインタビューは出来なかったが、大学構内を車で見学す

² この直線道路を利用して、毎年グランプリレースが開かれているとのことである。